

## 異郷と故郷との根源的な対話を試みる人

直原弘道詩集『異郷への旅』に寄せて

1

直原弘道さんは、父の詩集や妻との詩画集の企画編集をしたり、岡山県北と神戸の二つの故郷や家族を愛する詩人であり、また大地に耳を澄ます予知能力を持つ詩人だろう。その予知能力とは、絶えず自らの中に民衆とは何かを問うていて、その民衆の本来的なあり方や行く末を見詰めようとする願いから汲みあげられたものだろう。そして自分のことよりも民衆の不幸を我がことのように考えて、それに寄り添って生きようとしているからではないか。内なる民衆を見詰めながら、同時に愛する人を通して他者を発見していくという抒情的な思いも詩行に濃厚に感じられる。そのことよって直原さんの詩に特長的なことは、異郷の他者の視点を絶えず自己の内面の深みに据えようと試みていることだ。そんな多様な民衆や他者との格闘の中で詩作を一貫して試みようとしてきたように感じられる。直原さんは名古屋市長生れだが、父の直原恒（つね）の実家は岡山県赤磐郡にあり、戦前・戦後に津山市の学校に通っていたこともあり、赤磐郡との結びつきは強い。戦後になって神戸で生活し始めた直原さんは、岡山県北の山

間部と神戸という都市の二つの故郷を背景とした詩人として誕生していくのだ。戦後のまもない一九四七年の十七歳の頃には神戸市立図書館勤務の仲間と一緒にサークル誌「破壊者」を始めて文章も書き始めた。一九五一年には新日本文学会に参加し、一九五六年には「青い実」というサークル誌を主宰している。詩人としての大きな転機は一九五七年に同人誌「輪」に三号から参加したことだろう。後に「輪」の編集発行人を務めるようにもなる。

第一詩集『ひびきのない合図』は一九六七の三十七歳の時に刊行された。一九五〇年代の農地改革も終わり、六十年安保闘争の熱気も消え、戦後革命は、高度成長に飲み込まれていった時期だったろう。その当時の心情を託して次の時代の自らの課題を模索しながらタイトル詩「ひびきのない合図」は書かれたのだらうと思われた。

### ひびきのない合図

静寂のなかで

野の花のながい香りが風とともに朽ちていく

あざやかな芽ぶきは何時のことか

不妊の種子を播きながら

きたるべき雨にすべてを託し

ささやきのようにじりじり増殖する

きみときみたちの頹廢

もはやうたがうことも忘れるほどに

いつともしれぬ合図を待つことにも馴れ

巫女のように呪文を唱えながら

手垢でひかる竹槍をみがいて老いる

そのながい年月には

夢のなかですら感覚が麻痺してくる

あの旗を降ろしてくれ

あれはきみたちのじゃない

いやばくたちのものでもない

駆けよりよじのぼろうとする

ところがあまりにながくうづくまりすぎた

足が愛想づかしして行方不明

義足のようにぎこちなくコトコト

ひとりあるきをはじめている

そいつまで他人のようにきみを見る

その眼に映るのは

すべてのやさしさをふみにじって

なおまどろむことのできるきみの裏切り

過ぎ去った昨日のことではない

驟雨が雷鳴を伴ったある朝

陽炎のむこうに揺れる地平をのぞんで

追い立てられるように決別したのは

いたるところ

渴きがあり 地割れがあり

そこにのめりこんで行き倒れている白骨があり

抱きおこせば

これはきみの父 これはきみの兄

捨ててきた家郷を恋うかのような

風化のひびきのなかで崩れていく

死者の腕すら未知の行方を指さしてはいない

この後戻りきかぬ荒野では

そこにおおくの挫折の意味を読む

養うべき一片の土地がなくとも

眼窩からこぼれおちるものを飲みほし

誇らしく頭をあげていた人々の

その勇気をうちくいだいたものは何であったか

目をすえて

ひびきのない合図に耳をすますと

みるみる貌をかえていく太陽がある

直原さんは、朝鮮戦争から第一次安保闘争を経過し、日本における戦後革命の挫折と日本資本主義の高度成長期への突

入が明瞭になる時代に、新しい旗を掲げて生きることの苦悩を語り、その報われなかった死者達の白骨を発見してしまう。その白骨を拾うとそれは「きみの父」や「きみの兄」であると幻視してしまう。そして「挫折の意味」を考え始める。「誇らしく頭をあげていた人々の／その勇気をうちくだいたものは何であったか」を問い始める。直原さんは戦後革命が果たせなかった本来的な「誇らしく頭をあげていた人々の勇氣」を反復しようとしていたのではないか。「ひびきのない合図」とは、挫折した戦後革命の真の響きを取り戻したいという直原さんの切なる願いだったのかも知れない。そのような意味で直原さんは戦後の世界の政治・経済・文化活動のただ中で翻弄された民衆が、誇らしく生きようとする活動を詩作と通して実践していこうと第一詩集に記した。「ひびきのない合図」とは、「挫折」を乗り越えて「民衆の連帯の合図」を探し求めていた直原さんの願いが隠されていたのかも知れない。

2

一九八一年に第三詩集『霧がはれる』を刊行した。そのなかに「眼を病む」という詩があり、この詩はある意味で十五年後の阪神淡路大震災を予知していたように思われる。

### 眼を病む

の詩には、そのような予知能力に促された純粋な透視力がある。「溜まりたまった砂泥の上に／この街は埃のようにとまっているだけだ／確実にすすむ地殻変動が視える／病んでいるのはぼくの眼だけか」という危機意識がもつと大きな輪になり、この地域の行政などに浸透していたら大震災の被害はもつと抑えられていたかも知れない。「砂泥の上に」自分の街が立っていることの不思議から、「地殻変動が視える」と語る直原さんは、この神戸の街を誰よりも愛し、そして行く末を考えていたように思われる。真に見るとは、表層を見るだけでなく、同時に深層も見なければならぬのではないかと自己に課して詩作を継続しているように感じられた。

直原さんは一九八七年に第五詩集『暮れなずむ』を刊行した。冒頭に「父の死」という詩がある。父の臨終場面を伝える詩なのだが、辞世の言葉を息子の掌に書き記した感動的な詩である。このような父と子の関係は、よほどの信頼関係があったに違いないだろう。

### 父の死

差し出した掌をつかまえて  
「モウ オエン トオモウ」  
と指で書く

その時ぼくは眼を患っていたが  
眼帯の下ではむしろ鮮明に視えるものがある

喪に服している北方大陸

その地続きで死を宣告する法廷  
渦を巻いて接近する大型台風の姿態と貌

どうなっているのか六甲山系

いくら掘っても岩盤が出ない  
ボーリングに立会ったN君が言う

何万年と流され崩され  
溜まりたまった砂泥の上に

この街は埃のようにとまっているだけだ

確実にすすむ地殻変動が視える  
病んでいるのはぼくの眼だけか  
病んでいるのはぼくの眼だけか

私はこの詩を読んだ時に、直原さんは眼に見えないものの地層の想像を巡らし、将来の地殻変動に耳を澄ませ、阪神淡路大震災の十五年前にこのような予言的な詩を書いていたことに驚いた。浜田知章さんはかつて優れた詩人には、予知能力がなければならぬと語っていた。その意味では直原さん

ながい人生のなかの  
最後のあきらめだったか  
それとも

氣力をふりしぼつての  
悲しいユーモアだったか  
ただだまって

うなずいていたわたし

数時間のうちに

潮が引くように去っていった

酸素マスクがはずされて

医師が去り 看護婦も去り

明け方の淡い光のなかに

よこたわる

ついさつきまで人であった

不思議なただけが残された

父から子へ手渡しされた言葉は、生きたことの尊厳であり、生き続ける子への最期の伝言だったように思われる。このような終末を迎えた父を直原さんは心から尊敬していたのだろう。自分の時間が終わる瞬間を自覚した父の言葉を、「悲しいユーモア」と直原さんは語っているが、私には人間の尊厳が守られた理想的な死に方のように思われてくる。直原さ

んは一九九〇年に『昭和という時代・中野重治をめぐる恣意的ノート他』という父と同じ年生まれの中野重治論を刊行した。また二〇〇一年に『驢馬のいななき』という父と同志の青木文次と、牧師で詩人の鈴木二郎の三人の活動を記した著作を刊行した。その本によると父である直原恒は、神戸高商（現在の神戸大学）を出て会社勤めを経て、名古屋でキリスト教系の金城女子専門学校の教師となった。後に昭和六年に始まったYMCAを中心とする社会的キリスト教会運動であるSCM運動（Student Christian Movement）に参加したという。十五年戦争が始まった頃に「キリスト者の学生・青年による護教的前衛活動であろうとし、また、そのようなムーブメントとして期待されていた」ことや「キリスト教の原点たるイエスにかえり、彼の神の国実現運動によって彼らの社会的実践に拮抗しようとした」と直原さんは記している。青木文次は「富山に生まれ、第四高校から名古屋医大に進み、将来を囑望されながら自らの信仰に従って名古屋の貧民窟でのセツルメント運動に身を投じ、陸軍刑務所から、武器を持たされない、階級章もない一兵卒として大陸に送られ、非業の死をとげた」という。直原恒はまた牧師で同僚でもあり詩人でもあった鈴木二郎を敬愛していて、その影響で亜獅子驢鳴というペンネームで詩作を生産し続けた。鈴木二郎は詩人フランシス・ジャムの翻訳もしていて直原恒の詩作に多大な影響を与えたという。生涯四十冊もの著作と訳書を鈴木二郎

#### オアシスの夜

天山山脈の麓で

夜毎 夏の空を眺めていた

黄塵の故か

星はいつも淡くかすんでいて

むかし

〈眼葉さしたら びっくりするほど

星がたくさん見えた〉

と書いてよこした従兄弟がいたな

その大陸からさえ駆りだされ

南方に送られる途中

船といっしょに沈んでしまった彼の

せつない渴望だった にちがいないな

文明にすり切れてしまった ぼくらには

我慢できないほど

くらくて しずかな 夜

眠られぬ驢馬だけが かすかに

みじろぎし 鼻を鳴らしていて

人間を救う思想 なんてものは いつでも

は残し、直原恒との共著随筆集『驢馬昇天』も出している。鈴木二郎は反戦平和教師の立場を貫いたり、外国人の知人が多いことから戦時中はスパイ容疑を受け、過酷な取調べをされたという。直原さんの家族は一九四五年に故郷に戻ったが、父は戦争中に身体を病み、家族も経済的に大変だったようだ。戦後、父は病も癒えて、村長、町長などの公職を二十年勤め上げた。直原さんは父の亡くなる前の年の一九七九年に直原恒詩集『驢鳴集』を編集発行したのだった。直原さんは、誰よりも父の良き理解者であったのだろう。なぜなら父の同志であった青木文次や鈴木二郎たちの実践的な活動の意味を理解していたからだ。直原さんの『驢馬のいななき』には、十五年戦争時代であっても貧しい人々の中に入り、医療などの救援活動をしたキリスト者であり詩人であった若者たちの高貴さとそれを押し潰していった時代の狂気が記されている。

#### 3

第四詩集『中国詩片』と一緒に第五詩集『暮れなずむ』は一九八七年に刊行された。あとがきによると一九七七年から一九八五年にかけて六度中国を訪れていて、その旅の経験からこの詩集が編まれ、文化大革命期以後の中国社会の「底知れぬ深さ」を感じて詩作したという。詩「オアシスの夜」を引用したい。

こんなところから ひよっこり  
でてくる のではなかったかな

この詩に出てくる従兄弟とは、詩人の安東次男の兄である安東太郎のことを想起している。安東太郎と次男は直原さんの母の姉の子である。直原さんは天山山脈の麓から見上げた夜空に戦死した従兄弟を偲んでいる。その便りに書かれてあった言葉の深い意味を未来に投げかける遺言のように反復しているのだ。そして「人間を救う思想」はこのような「くらくて しずかな 夜」からひよっこり現れるのではないかと語っている。このような「異郷への旅」から直原さんは、詩作の根源に他国の風土や他国の民衆からの視線を置き、自分が宇宙から見詰められていることを感じているのかも知れない。「文明にすり切れてしまった ぼくら」という言葉が身に沁みてわかるのは、この詩集が出た十年後の二十世紀末だろう。直原さんの詩行が言い当てていることは、人類が試されている文化・文明の根本的な精神の在りかたの問題だろう。その根本的な問題を直原さんは詩行でまっすぐ問うてくるのだ。その突き詰められた問いに向き合うことが、直原さんの詩を読むことの魅力なのだろうと私には感じられた。

一九九〇年に刊行した第六詩集『天神筋界限』では、日伯教育文化交流でブラジル各地を訪問し、その地で出会った人々の固有のあり方を素描している。この異郷の他者を見詰める

詩篇は、切れ味鋭く地球の裏側の多様な人生を浮き彫りにしている。直原さんは過度に感情移入しないでさりと彼らのほろ苦い生き様に敬意を抱いて紹介することに徹しているように思われる。

一九九四年には第七詩集『きざはしに腰をおろして』を刊行した。この詩集にはロシア、中国、ブラジルの中の様々な都市が語られている。その異郷を見る視線で日本の過去現在の風景が見られて抉り取られている。その視線はますます鋭くなつていて、何かを重要な未来の悲劇を予感しているようにも思われる。最後に置かれた詩「かたむいてゆく」を引用してみる。

かたむいていく

戦争は二週間も前に終わっていて  
村落も畑も人もなにもなかったと  
沖繩の洞窟から生還した少年が語った  
人間らしい心を持っていては  
生き延びられなかったと  
サイパンの終末に立ち会った少年も語った  
おさない時に垣間見た  
それぞれの地獄を胸にだきつづけて  
成人した彼らの声が胸のなかで鳴っている

もしれない。

4

一九九五年一月十七日午前五時四十六分に阪神・淡路大震災が起こり、六千人余りの命が切断された。直原さんの自宅も、辛うじて倒壊は免れたが、家具などの崩落飛散のみならず、建物の屋根、壁面、基礎部分に大きな被害を受けた。その後の出来事を直原さんは二冊の詩文集と詩集にまとめている。一冊は一九九六年六月に刊行した詩文集『直原弘道の大震災私記』と一九九九年三月に刊行した詩集『断層地帯』だ。その前に直原さんは一九九五年に『詩集・阪神淡路大震災一・二』と一九九六年一月に『詩集・阪神淡路大震災 第三集』のアンソロジーを伊勢田史郎さんと和田英子さんと一緒に呼びかけて実現させている。

詩文集『直原弘道の大震災私記』にも掲載されているが、詩集『断層地帯』の冒頭の改訂版の「景色がかわる」には、活断層による大震災の恐怖感とその悲劇の後に残された者たちの複雑な思いが記されている。

景色がかわる

何倍もの重さで叩きつけられ  
それから闇とはげしい揺れがやってきた

カサブタのように乾いて剥離していくもの  
蔽い隠されて実像と見誤っていたもの  
底無しの沼地に垂らされた錨のような  
われらの時代の根拠と信じていたもの

昨日までの干天がまるで嘘のようだ  
超大型台風が北上中で  
その前触れとして局地的集中豪雨が  
列島各地を水びたしにしている  
他人事のように映じだされる映像  
濁流が次第に護岸を掘り崩し  
足元浚われた家がかたむいて  
ほんとうにゆっくりと倒れこんでいく

直原さんは、「他人事のように映じだされる映像」で事実を見ているように錯覚している現代人の精神の在りかたを批判に問うている。沖繩戦やサイパン島の悲劇なども映像で見たものは、ほんの一部にしか過ぎず、それは意図された編集されたものだろう。当事者たちの心に残る映像にいか近づけていくという視点ではない。我がこととの視点でその危機的場面を見たり編集することはできないかという難問を直原さんは問うている。現代の映像に慣らされて、精神が知らず知らずに「かたむいていく」危機感をこの詩で語ろうとしたのか

揺すられるより先に飛び跳ねた  
海の底から山裾まで 地が裂け  
山塊が地鳴りとともに背伸びした  
その犯人とされた活断層という奴は  
何百万年前からこの地の先住民に他ならなかった  
彼らは何百何千回となく目を覚まし  
身震いしては溜まった埃を払い落とし  
新しい景色を次々に創りつづけてきた

その時々滅んだ生物があったかどうか  
何も痕跡は残っていない  
もちろん街などもとまなかった  
ずっと後にやってきた  
塵のような私たちが  
たまたまその景色の作り替えに立ち会ったのだ  
不遜にも築こうとしたバベルの塔が  
瞬時に崩壊したとしても  
地球にとつてそれはそれだけのことである

夜が明けて

壊滅した街が姿をあらわした  
庶民の暮らしがほんの数秒間で粉碎された  
あの戦争でも焼けのこった下町の長屋や

焼け跡の掘っ立て小屋からはじまって  
やっと手にいれたマンションにいたるまで  
すべて崩れ去った  
なによりも

六千数百の生命が突然絶たれたのだ  
何故と問う間もなかった  
死者の過半数を占めるのは  
この町で生きてきた老人たちであった

生き残ったわたしたちの  
疲れ果てた目に映るもの  
焼け跡や瓦礫のなかで  
早春の風に揺れている

避難先や家族の〈無事〉を告げるメッセージ  
点々と牛乳瓶に挿した花と供物  
何万人という日本人やアジア人が  
明日のない日を過ごしている  
学校や公園の片隅のテント

私たちにとって  
まだ何も終わっていない  
私たちにとって  
まだ何も始まっていない

向き合われなくて、無関心な物として、意味を剝奪されてしまふ。その人間が「記憶の意味」を忘却することの問題点を抉り出そうとして、中国の山村や日本の各地などを巡った記憶を語っている。二番目の「わが祭り」なども村の「共同体の仕組みが壊れていく」ことよって直原さんは「父祖たちの記憶が立ち上がってくるのだ」。その滅びいくものたちへの最後の目撃者に直原さんはなろうとしているのかも知れない。

二章「地下幻想」には十三篇の詩が収められて、直原さんのスケールの大きい発想で、例えば中国の盧溝橋のほとりの記念館で、広島原爆のことや七歳の時に勃発した盧溝橋事件を想起していく。その場所に立ちながら、自らの記憶を検証し後世の「記憶の意味」を問うていこうとしているのだと思われた。

三章「悼み言葉」十篇は、妻や詩友などの鎮魂詩が書かれている。同時代を生きた直原さんの哀切の想いや嘆きは深い。しかし最後に収められている「アヴァンギャルド考」の最終連は、直原さんの精神の若さを実証していて、読むものを逆に励ましている。その詩を引用してこの小論を終えたい。岡山県北と神戸を愛する人たちはもちろん、戦前・戦後の詩作をアジア・中国、南米・ブラジルなど世界規模で考察したいと考えようとする方には、直原さんの試みはとても参考になると思われる。

直原さんの視線は、人間中心の視点ではなく、地震の実相を地球規模の何百万年単位で捉えている。活断層の上に街を作ることに人間の愚かさを認めながらも、それに立ち向かわざるを得ない人間の逞しさも告げている。しかし大震災の悲劇は半数以上が老人たちの圧死であるという現実の前に、「点々と牛乳瓶に挿した花と供物」を添えるしかできない神戸の民衆の思いを直原さんは代弁している。大震災から得た教訓は、神戸が「まだ何も終わっていない」「まだ何も始まっていない」未来の街であることだったに違いない。そして神戸は、直原さんにとって神の国の戸を開けるような人々の生きる場所であり続けるのだろうか。

## 5

十年ぶりの新詩集『異郷への旅』は『断層地帯』以後の詩篇を集めた十一冊目の詩集だ。一章「異郷への旅」には十四篇が収録されていて、冒頭には「記憶の意味」が置かれている。その三連で直原さんは「あり様が変わってしまったのだ／他者の立ち入りを拒んで／ひとは扉を閉じるようになった／危険な知恵の鍵をいくつかこじ開けて／豊かになったと思いつての記憶の意味を忘れてしまった」と言う。記憶とは経験の豊かさなのだが、他者との共有すべき「記憶の意味」が崩壊する危機感をこの詩で伝えている。他者が他者として

## アヴァンギャルド考

今は忘れられてしまった  
あの国の旗  
鎌とハンマーの組み合わせが好きだった  
虐げられた労働者農民が主人公になり  
その英知はやがては国とか権力を消滅させる  
その人類的夢を信じたかった

僕たちの時代は流産した  
過去の清算を準備しはじめている人は  
ファクションに移りただけのように  
フォアグラのような脳味噌で  
その周辺に漂っていたのか  
みんな物分かりがよくなつたなあ  
見事にみんな立ち枯れてしまったなあ

アヴァンギャルド  
前衛といおうか 先駆といおうか  
忘れ去られた言葉よ  
消え去った文学流派よ  
棄てられるのは  
変革を求めて一歩先を歩く精神なのだ

忘れられていくのは

衣のしたの鎧を隠して媚びを売る

そういう事を拒否する魂のことだ

民衆に向けて語るのではなく

言葉の組み立てパズルに熱中する

今様詩人を弾劾する高貴さのことだ

世の中すべて

重厚長大から軽小短薄へ流れていく

その流れにさからいつづけて生き残る

最後のアヴァンギャルドは

もういないか